

氏 名	ささ ま ふみ こ 笹 間 史 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 182 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 言 語 学 専 攻
学位論文題目	A Descriptive Study of the Coast Tsimshian Morphology (海岸ツィムシアン語形態論の記述的研究)

論文調査委員 (主 査) 教 授 吉 田 和 彦 教 授 庄 垣 内 正 弘 教 授 田 窪 行 則

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、海岸ツィムシアン語形態論を幅広く記述することを目的とする。19世紀末にフランチ・ボアズが海岸ツィムシアン語研究の基礎を築いてからすでに一世紀以上になる。その間、何人もの研究者が精力的にこの言語と取り組んできたが、いまだ十分な記述がなされていない形態面の問題は多い。海岸ツィムシアン語形態論の詳細な記述への道のりは未だ遠いものの、本論文により、これまで十分な取り扱いがなされてこなかったいくつかの問題について明らかにすることができたと考える。以下に本論文の内容を章立てに沿って見ていく。

第1章では、海岸ツィムシアン語についての基本的な情報を示した。海岸ツィムシアン語は、カナダ北西部からアラスカ南東端にかけて話される言語で、系統的にはツィムシアン語族に属する。話者数は200～500人ほどと考えられている。

本論文の中心である形態論についての議論にうつる前に、第2章で音韻論を概観した。2.1で子音の、2.2で母音の音素目録をそれぞれ示し、2.3では2種類のストレスの記述をおこなった。2.4では、「分断母音」の問題に焦点をあてた。海岸ツィムシアン語における、間に声門閉鎖音をはさんだ音色のほぼ同じ二つの母音は「分断母音」と呼ばれ、音韻的には声門化子音に後続された長母音と解釈される。しかしながらこの解釈は、「貧しい」「はい」「従う」「祝う」という四つの語に見られる、分断母音に音声的に類似でありながら分断母音よりも長い音を解釈する際に、音声的類似にもかかわらず音韻的に平行的な扱いができないという問題をうむ。この問題が生じた原因として、かつて長短両方の分断母音が存在したが、この区別が消滅し、両者共かつての短分断母音のように発音されるようになった可能性が考えられる。海岸ツィムシアン語と同系他言語の双方からのさまざまな資料により、この仮説が支持されることを示した。

第3章では海岸ツィムシアン語の形態論についての記述を試みた。まず3.1において、屈折をおこなう語がどのような語類に分けられるかを検討した。その結果、近隣のいくつかの言語で報告されている名詞と動詞の区別の困難さが海岸ツィムシアン語にも見られ、これまで伝統的に「名詞」「動詞」と呼ばれてきたものが形態的・統語的には明確に区別できないものであることが明らかになった。これは、海岸ツィムシアン語において「名詞」と「動詞」が共に述部 (predicate) としても項 (argument) としても用いられること、述部としてあらわれる「名詞」と「自動詞」の主語が同一のマークを受けること、そして、項としてあらわれる「自動詞」の主語が所有接辞によりマークされることが理由となっている。形態的・統語的基準にもとづき、はっきりと区別されるのは、一項をとる語と二項をとる語の2種類のみである。これ以上細かい語類への明確な分類は、現時点では可能とは思われない。とはいえ、このように分けた二つのクラスの成員が必ずしもそれぞれ一様の振る舞いをするわけではない。一項をとる語は、文中で述部／項のどちらとしてあらわれる傾向にあるか、アスペクト重複と共起するか否か、項増加型の接辞により結合価を1から2に増やせるか、等のいくつかのテストにより、名詞類・自動詞類・形容詞類・数詞類と仮に呼ぶ四つにおおまかに分けることができることを示した。

3.2, 3.3, 3.4では、副詞、疑問詞、小詞をそれぞれとりあげた。海岸ツィムシアン語の小詞のうちでもっとも重要なものは時制・アスペクトマーカである。時制・アスペクトマーカは一つ～三つの小詞の組み合わせからなり、第1番目に

くる小詞により人称倚辞、人称接尾辞、連結辞の選択が決定される。本論文では、これまでに報告されていなかった数種類の時制・アスペクトマーカ―を同定した。なお、連結辞は音声的には先行する語につき、後続の語についての情報（主語か目的語か、固有名詞的（proper）であるか否か等）を担う後倚辞である。

連結辞をふくむ倚辞については3.5で記述をおこなった。まず3.5.1でいくつかの前倚辞の例を見るとともに、海岸ツィムシアン語において前倚辞が接頭辞とどのように異なるかにかんし、いくつかの判断基準をあげた。基準としたのは、後続の語（または語幹）との間に音声的なぎれが聞かれるかどうか、前倚辞は接頭辞に先行すること、隣接しあう二つの要素が互いに位置を取りかえるか否か、アスペクト重複をうけるか否かなどである。これらの基準をもってしても、未だ前倚辞と接頭辞の区別はしばしば困難であるが、接辞と倚辞の区別がこれまでかなりあいまいに扱われてきた海岸ツィムシアン語でこのような基準に言及することは意味のあることだと考える。3.5.2では人称倚辞の形とその選択について見た。人称倚辞はホストとなる語の形により、前倚辞または後倚辞としてあらわれる。3.5.3は（連結辞を含む）後倚辞を扱った。連結辞は、後続の語の統語的役割、時制・アスペクトマーカ―などにより選択されることを示し、さらに法をあらわす後倚辞など、他のいくつかの後倚辞の形と用法についても同定を試みた。

3.6では接辞について記述した。まず3.6.1では接頭辞を扱った。100をこす派生接頭辞を概観し（数が多いため、詳細な記述は付録にまわした）、二つの複数接頭辞による複数形形成法を記述し、所有接頭辞の使用について考察した。3.6.2では派生接尾辞、複数接尾辞、屈折接尾辞の三つの接尾辞を扱った。海岸ツィムシアン語には少なくとも10の派生接尾辞がある。これらは主としてボイスの変換に関与し、その多くはきわめて生産的であるが、先行研究ではあまり扱われることがなかった。この節では、使役、受動、逆受動といった機能に加え、二つの派生接尾辞が共起する際の位置関係を明らかにした。屈折接尾辞の節では、これまでしばしば誤って人称接尾辞と解釈されていた「二項マーカ―」の存在を指摘した。また、2種類の人称接尾辞にかんして、その形を再検討するとともに、時制・アスペクトマーカ―によって選択がなされる様子を記述した。

3.7では重複に焦点をあてた。まず、先行研究でもしばしばとりあげられてきた、複数性をあらわす大きく分けて4種類の重複の形成法を概観した。そのうち、重複には複数性をあらわすものに加えて継続アスペクトをあらわすものがあることを指摘し、これまでまったくといっていいほど記述のなかったそのアスペクト重複の形成法について記述した。継続アスペクトをあらわす重複は、重複部の子音と母音の選択および語中で重複部が占める位置にかんして複数性をあらわす重複と異なることを指摘した。

3.8は合成を扱った。海岸ツィムシアン語において合成は重要かつ生産的な方法でありながら、その形成法についての記述はこれまでほとんど見られなかった。どのような関係にある構成要素が組合わさって合成語幹が形成されるのか、構成要素間にはどのようなつながり要素があらわれるか、合成語は句と音声的・形態的にどのように異なるかを記述した。

第4章では、複数性の表示に焦点をあてた。まず、第3章で記述した重複と複数接辞以外で複数性の表示に関与する、6種類の数詞とその他の数量詞、そして「一たち」を意味する前倚辞の形と用法を示した。また、単数形と複数形とでまったくつながりのない形が用いられる補充法にも言及した。第4章の後半では、文中で複数性がどのように表示されるかについて考察した。数種類の重複、二つの接辞の付与、補充法などの方法によって形成された複数形が文中でどのようにあらわれるかを観察した結果、次のことが明らかになった：1）複数性は、項と述部、修飾部と被修飾部というように文中の2カ所以上で表示することが可能であり、その際1カ所のみで複数性の表示をおこない、残りの箇所では複数性を表示しないことも可能であるが、2カ所以上で表示する傾向がある、2）複数形形成法の一般性・生産性と複数形のあらわれとは関連がある。一般的、生産的な複数形形成法を用いる語はしばしば複数形をとると予想される際に単数形であらわれるが（ただし、他のいずれかの語が同じ項の複数性を表示している場合に限る）、珍しく、非生産的な形成法を用いる語は、他に同じ項の複数性を表示している語があっても複数形であらわれる。

本論文の末には、独立人称代名詞の用法についての短い補説と、付録として派生接頭辞のリストをつけた。補説では、一般には人称倚辞・人称接尾辞としてあらわれる人称詞がどのような場合に独立人称代名詞としてあらわれるのかを記述した。付録では、派生接頭辞を、語幹のとり項数を変えるか否か、一項をとる語幹につくか二項をとる語幹につくかにより分類し、例文と共に示した。

論文審査の結果の要旨

海岸ツィムシアン語 (Coast Tsimshian) は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の北西海岸およびアメリカ合衆国アラスカ州南東部で話されている言語である。話者数は、およそ200~500人と推定されており、いわゆる消滅の危機に瀕している先住民言語である。系統的には、ナス語 (Nass)、ギトクサン語 (Gitksan) などとともにツィムシアン語族に属する。19世紀後半以来、数人の研究者がこの言語を対象にした言語学的研究を手掛けており、また重要な成果が提出されているが、文法体系の全貌が記述されたとは未だに言い難い。本論文は、過去9回に及ぶ夏の現地調査で論者が収集した資料に基づいて、海岸ツィムシアン語の複雑な形態組織を詳細に報告したものである。従来まったく見落とされていた興味深い言語事実も数多く指摘されており、これまでの研究水準を高める意義ある成果と言える。

第1章で海岸ツィムシアン語の一般的な特徴と本研究のスコープが示されたあと、この言語の音韻組織が第2章で概観されている。音韻組織全体の理解は第3章以降でなされる形態組織の記述の前提として不可欠であるが、同時に論者自身による新たな知見も示されている。それは分断母音 (interrupted vowel) の音韻論的解釈である。分断母音とは、声門閉鎖音が2つの母音のあいだに介在するかたちで音声的に実現するものを指す (【VPV】)。この分断母音は、いくつかの根拠から音韻的に長母音に声門化音が後続するもの (/V:C'/) と論者は考える。しかしながら、このように考えるならば、海岸ツィムシアン語では音韻的に声門閉鎖音の前に長母音はみられるが、対応する短母音が存在しないことになってしまう。この問題について、同系統のナス語とギトクサン語において、同じ環境で母音の長短の区別があることから、論者はつぎのように考える。すなわち、共通祖語の段階では声門化子音の前で長母音と短母音の対立があったが、後に海岸ツィムシアン語においては長母音が一般化され、古い状態はナス語とギトクサン語に保存されている。この解釈は、歴史的な文献記録を持たない言語群に対して比較言語学方法を適用することによって得られた重要な貢献と考えられる。

第3章は形態論についての記述であり、本論文全体のおよそ6割の頁がこの章に費やされている。まず、これまで伝統的に名詞および動詞として取り扱われてきたものが、実際には形態的にも統語的にも明確には区別できないことを示している。その理由は、両者ともに述部 (predicate) としても、項 (argument) としても用いられることによる。形態的、統語的基準に基づき区別できるのは、項を1つとる語と2つとる語の二種類の区別のみであり、それ以上の細かい語類への下位分類は現時点では不可能であることが指摘されている。

つぎに、副詞、疑問詞、小詞 (particle) に関する報告が続く。特に注目されるのは、小詞のひとつであるテンス・アスペクトマーカに関するものである。この言語にはテンス・アスペクトを示す小詞は10以上あり、どれが選択されるかによって、後に続く人称倚辞 (pronominal clitic)、人称接尾辞 (pronominal suffix)、連結辞 (connective) の組み合わせが決まってくる。論者はこれまで報告されていた以外のテンス・アスペクトマーカを新たにいくつか同定し、さらにそのそれぞれのテンス・アスペクトマーカがどのような人称倚辞、人称接尾辞、連結辞と結び付くかを明らかにした。さらに、接辞に関する報告においても、従来十分な観察がなされてこなかった派生接尾辞の形式、機能、配列順序を明らかにするとともに、これまで人称代名詞と誤って解釈されていた形式が屈折接尾辞であることを示すなど、いくつかの重要な指摘がなされている。

第3章の最後では、重複 (reduplication) と合成法 (compounding) という2つの語形成が扱われている。重複が複数性を表わすために用いられることは先行研究においても述べられていたが、継続アスペクトを表わすものもあることが示されている。また、この言語において合成法が語形成において生産的な役割を果たしていることを明らかにし、合成語が音声的、形態的な観点から句とどの点で区別されるかについて述べている。

第4章では、複数性の表示法についての調査結果である。第3章ですでに述べた接辞と重複以外に、数詞、数量詞、前倚辞、さらに補充法 (suppletion) が複数性をマークするために用いられ、文中においては2つ以上の方法で複数性が表示される傾向が顕著であることを明らかにした。

本論文は長年に及ぶ調査報告の現時点における総括であり、多くの新しい言語事実を提出している点できわめて貴重な研究として評価できる。しかしながら、物足りなさを感じる点もある。それは、一般言語学的な視点からの分析が不足している点である。たとえば、重複や合成法といった第3章で扱われた問題は、世界の多くの言語にみられる語構成の方法であり、

理論言語学や言語類型論の研究などにおいても議論の対象になっている重要な問題であるにもかかわらず、本論文ではそれらの研究に対する言及がみられない。しかしながら、現象の報告だけにとどまり、分析が不十分であることは、フィールドに従事する言語学者の研究によくみられることであり、論者に限られた問題ではない。この点は、今後の課題として論者が取り組んでいくことを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成13年3月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事からについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。